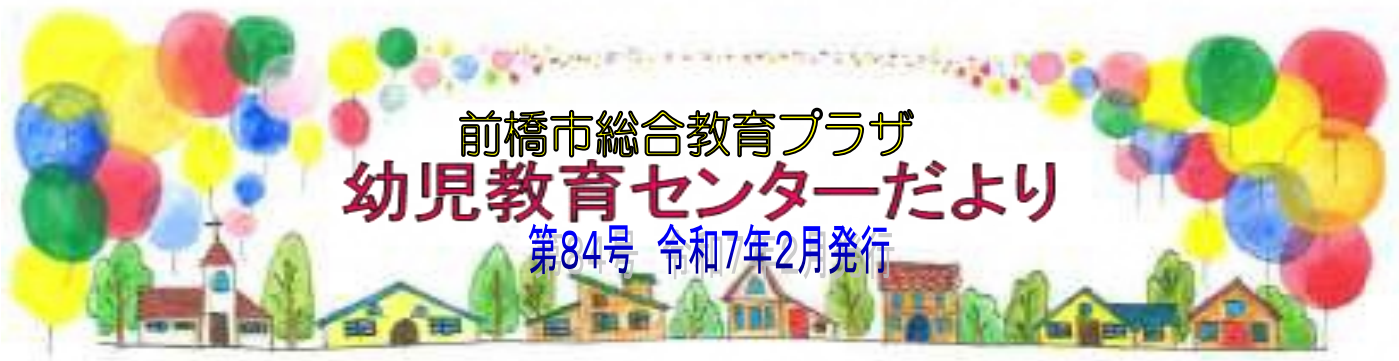




前橋市総合教育プラザ 幼児教育センターだより

第84号 令和7年2月発行



「待つことを楽しむ」

前橋市立まえばし幼稚園
園長 橋 爪 浩 子

「ジャンケンポン!」「あいこでしょ!」という年長さんの声がさっきからずっと園庭に響いています。先生はその様子をじっと見つめています。年長さんがサツマイモ掘りで収穫したイモをみんなで分けようとしている場面です。大勢でのジャンケンはなかなか決まりません。でも、先生は「二人組でまずやって」などとは言いません。

そのうち、A 男が「他のやり方じゃないと決まらないよ」と言い出し、みんなで考えます。「背の順に好きなのを取る」「名前の順に取る」「1 個目の大きさの順に取る」「腕の長さの順に取る」等いろいろな意見が出され、反対意見も出て修正されていきます。その間、先生は子どもたちのやり取りを楽しみながらじっくり待っています。

この日、長い時間をかけて決まった方法は、「背の順に並んで一番大きい子と小さい子がジャンケンをして勝った方から好きなのを取っていく」でした。

ここには、一つの課題に向かい、時間をかけて、個々で、集団で考え、話し合い、折り合いをつけ、結論に至るという「主体的対話的で深い学び」があります。そのためには、教師は子どもの主体的な発想や解決力を信じ、ひたすら待ちます。

「待つこと」は、単位時間の枠が決められた中で授業を行う学校とは違い、幼稚園からできるのではと思う方もいるでしょう。確かに「待ち時間」の限界はあると思います。でも、注目してほしいのは、教師が「待つことを楽しむ」姿勢です。

「待ち時間」には、子どもたちの発する予想外で独創的な言葉や様子に溢れ、一人一人の発想の面白さや特長、そして何より大きな成長を感じることができます。「あの子が大きな声で自分の考えを言えた」「〇〇ちゃんのアイディアはすごい」「お友達の考えをよく聞いている」等いろいろと感心しながら、にこにこ楽しそうに待っている先生に包まれ、子どもたちは安心感の中で伸び伸びと自分の思いを表せるのです。

コスパ、タイパ優先の現代社会の中で、子どもたちの周りにも「待てない大人」が増えているように思います。学校現場でも、家庭や地域でも、大人の忙しさの中で、果たして「待つことの楽しさ」を感じる余裕が持てているのか、それ以前に、子どもの目線で「待つこと」さえもできているのかどうか（自戒を込めて）心配になります。

県の教育ビジョンである、「自分で考えて、自分で決めて、自分で動き出す」子どもを育成するためには、子どもたちの本来もつ力を信じ、適切な環境構成をし、見守りながら待つ。その上で必要な時に必要な手を差し伸べる。幼児教育や学校教育に限らず、子どもたちに関わる全ての大人たちが今一度認識すべきことではないでしょうか。

こども教育研修会から

今年度も多くの先生方に、こども教育研修会に参加していただきました。参加していただいた先生方からの感想を一部紹介します。

第1回 「子ども主体の保育とは？」

～遊びの見取りと保育者の関わり～

元高崎健康福祉大学教授 高梨 珪子 先生

保育は一人一人のこどもの姿からオーダーメイドで考えていくという言葉が印象的でした。こどもは常に「私を見て」「私の話を聞いて」と発信しているのでその思いを見逃さずしっかりと受け止めていくには、こどもの顔をよく見て、声や言葉を聞くことが大切なのだとは改めて感じました。



第5回 「主体的な遊びを支える環境の構成」

お茶の水女子大学 教授 宮里 暁美 先生

こどもが「自ら育つ姿」を大切にしながら、一緒に考えたり面白がったりして関わっていきたいと思います。こどもの「？」を受け止め、様々なことにゆっくり取り組める時間、場所、仲間が大切で、それによって遊びが深まり、探究する姿につながっていくということが分かりました。

第2回 「困ったときどうしたらいいの？～助けを求める力を育てるために保育者ができること～」

星槎大学大学院 教授 阿部 利彦 先生

こどもたちが援助を求めたときに傷ついた経験をする困ったときに助けを求められなくなるという言葉にドキッとしました。こどもたちが援助を求めやすい環境作りが大切なのだと思います。援助を求めている子に対しプラスの感情（助かった、安心したなど）を体験させてあげたいです。

第6回 「子どもの人権を大切にする保育」

幼児教育アドバイザー 塩崎 政江 先生

こどもの権利について改めて考えさせられ、日々の保育の中でも声かけなど気を付けていきたいと思いました。こどもたちと信頼関係を築くことが人権を守ることにつながるという話や保育者が何かをさせるのではなく、こどもが主体となって楽しむことを第一に考えた保育の大切さを再確認できました。

第3回 「気になる子の理解 ～『言葉の認識の違い』と『脳のスクリーンの作業の違い』について～」

D-discovery まつなみ 代表 松波 芳子 先生

多数派の脳、少数派の脳があり、捉え方や感じ方の違いがあるということを知りました。その子の脳のパターンに合った関わり方をしていくために、その子の脳に何が映っているかを考えながら保育をしていきたいと思いました。

第7回 「保育を語り合おう

～写真に写る子どもの姿から～

幼児教育アドバイザー 大島 みずき 先生

写真を選ぶときから、こどもたちは、どのように思っていたのかなという考えさせられました。一枚の写真で、他の先生からもたくさんの考えや思いが出てきて、私を感じていなかったことにも気付くことができました。「保育を語り合おう」ということは、次は何をしようか、何を経験させてあげようかという次への保育につながる良いきっかけになると感じました。

第4回 「気になる子の支援～適切な支援をするために～」

D-discovery まつなみ 代表 松波 芳子 先生

気になる子の行動をふと考えたとき、もしかしたらこの子も少数派だったのかな？と気付くことができました。少数派のこどもでも多数派のこどもでも、活動を「見える化」してあげると、誰にでも優しい支援になるということが分かりました。少数派の子に伝わる教え方を支援者が身に付けていくことが大切だと感じました。

第8回 「保育の中の絵本

～発達に応じた絵本とその役割～

幼児教育アドバイザー 永井 広子 先生

今回の研修会で具体的な絵本の役割、本質を知りました。絵本をみんなで共有する楽しさ、みんなと読む嬉しさやワクワク感は保育の中の絵本ならではのと思いました。この絵本なんだか好きだな、楽しいなと思ってもらえるように読み聞かせをしていきたいです。

来年度の研修については、4月に前橋市のホームページにて案内いたします。

ご参加お待ちしております。



保幼小連携としての取組

前橋市では、年に2回幼児教育に携わる先生と小学校の先生が共に学ぶ保幼小研修会と、各地区ブロック（18ブロック）で行う保幼小連携地区ブロック研修会を行っています。研修会の様子と先生方の感想を一部紹介します。

保幼小研修会

「保幼小の連携について～架け橋期の具体的な取組について～」

講師 群馬大学共同教育学部教育実践センター 教授 安藤 哲也 先生

〔保育園(所)、幼稚園、こども園関係者〕

幼児期に園で楽しんだ遊びや活動などの体験が小学校に行ってから、経験したこととして思い出し、役立つということを再認識しました。様々な体験や学びができるよう入学までこどもたちの想像力を広げる保育をしていきたいです。

〔小学校関係者〕

幼児期の経験を整理するのが小学校の役割だということを伺い、新しく教えるのではないということが分かり意識が変わりました。こどもたちには幼児期に生活や遊び等様々な経験から得た学びがたくさんあり、小学校の学習に活かしているということがよく分かりました。

保幼小連携地区ブロック研修会



大胡地区ブロック（おおご幼稚園）



研修会内容

①保育参観・授業参観

幼児教育と小学校教育における学びの連続性やつながりを視点に参観していただきました。

②テーマについての情報交換

こどもたちの幼稚園での経験を知り、その経験を小学校でどのように活かしていくかを先生方と考えました。

〔年長児 発表会に向けて

学級全体で取り組んでいる場面〕
での感想より

- ・劇でのセリフや立ち位置を自分たちで考えて、言ったり行動したりしている様子がみられた。
- ・先生の言葉かけが一方向的でなく、「どう思う？」「どうするんだっけ？」とこどもたちに気付かせたり、考えさせたりするような話し方がよかった。
- ・こどもたち自身が考えて、友達に提案したり、話し合ったりする場面がたくさん見られた。
- ・45分間同じことをするのではなく、20分前後で集中して取り組めるような内容の工夫を新学期の授業に取り入れていこうと思った。

保幼小連携全体研修会

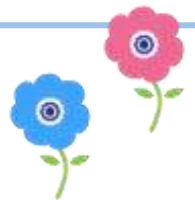
「架け橋期の保育・教育でもとめられるもの

～令和7年4月に向けて、今すること～

講師 幼児教育アドバイザー 塩崎 政江 先生

出前研修でのアドバイザー活用

園内研修における幼児教育アドバイザーへの講師依頼が増えてきています。出前研修の様子を一部紹介します。



園内研修（こまがた幼稚園）

〔依頼理由〕

“遊びを中心とした保育” “子どもたちが好きなことに取り組める保育”を進めていくために『主体的な保育について』講義・助言をしていただきたい。



幼児教育アドバイザーに保育参観をしていただいたからの研修ということで、「子どもの主体的な活動と先生の役割」を自園の保育を振り返りながら分かりやすく学ぶことができました。先生たちのモチベーションが上がる楽しい研修となりました。引き続き活用させていただきたいと思います。

「 伝 わ る も の 伝 わ っ て い く も の 」

元気に園庭を走り回って遊ぶ姿、遊具を利用して遊んでしゃぐ姿、木の実・草花・虫・小石を見て触りそれぞれ遊びに取り入れる姿、私が幼稚園で過ごし始めてから毎日見る子どもたちの変わらぬ姿です。年月がたって子どもたちが育ち卒園し、新しい子たちが入園してもその光景は続いていきます。年々歳々花相似たり 歳々年々人同じからず

春、園庭に草花が生い茂っています。桜の実や色んな葉っぱを収集したり思い思いに遊びます。オオバコの茎で引っ張りっこをする子もいます。どんな草かわからない年少児が年長児・年中児から教わっている姿を見かけます。来年は教える側になれるかな？

夏、ダンゴムシ探しが始まります。どんなところにいるのかな。上手に探す年長児、後をついて行ったり一緒に探してもらったりして気づきが促されています。虫探しだけではなく虫を捕まえた後の扱い方も然り。

秋、オシロイバナの遊びが始まります。年長児・年中児の真似をして種の採取を始める年少児。だんだん種の採取だけでなく他の遊びをしていることに気づきます。子房を引っ張りおしべを紐に見立て落下傘にしたり、アリの釣ってみたり、見よう見まねで遊ぶ姿が見られ、遊びが伝わっていきます。

冬、なわとびで遊ぶ子が多くなってきます。よく見ていると年長児が年中児にコツを一生懸命言葉を紡いで教えています。ドッジボールなどの遊びにも他学年の子が混ざろうとします。うまくルールを伝えられるかな？

ここは子どもの世界です。交流の中で様々な情報が飛び交います。もちろん子どもたちそれぞれの感性で様々な遊びが展開していくものもありますが、こうして子どもたちから子どもたちへ伝わっていくものもたくさんあります。保育の場は大人から子どもへ教え伝える場面が多々ありますが、子ども同士のコミュニケーションで受け継がれていくものも大切です。保育者は環境を設定し園や保育室の場を構築します。しかし、園庭で遊んでいる何気ない風景の中にその園がそれまで培ってきた、子どもたちが伝えてきた“文化”のようなものがそこには存在し、子どもたちの表情や遊びの中に表れ、園の雰囲気作りの根っことなっているのではないのでしょうか。

【認定こども園勤務】

